

II型肺胞上皮に感染

新型インフル死亡患者剖検

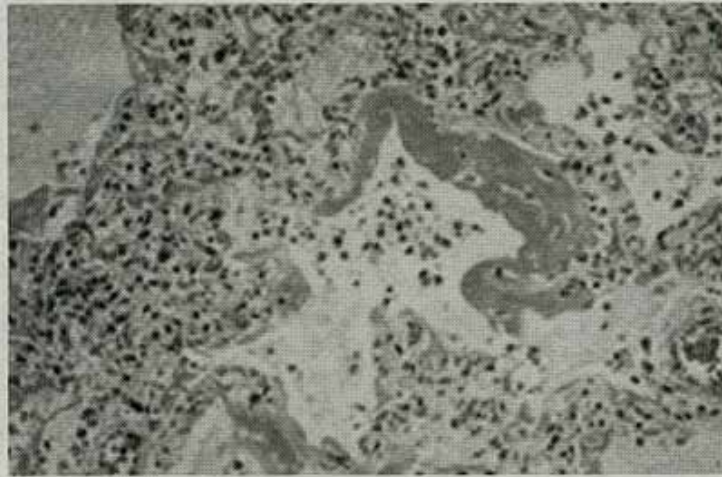
急性肺炎を発症

季節性と大きな違い

田中北大教授

新型インフルエンザ (A/H1N1pdm) による死亡患者のII型肺胞上皮(サーファクタント産生細胞)に多量のウイルスが感染していたことを、北大腫瘍病理学分野の田中伸哉教授と国立感染症研究所感染病理部の佐多徹太郎部長グループが突き止めた。ウイルスが急性肺炎を直接引き起こし、死亡する事例を示した知見として注目を集めている。

新型インフルエンザ (A/H1N1pdm) による死亡患者



肺胞がつぶれ、急性肺炎を示す画像

季節性インフルエンザ (H1N1) のウイルス感染は気道上皮でとどまり、肺胞まで到達しないのが一般的。しかし、二十一年八月に剖検した新型感染死亡患者(四十一歳)の肺胞からはウイルスが検出され、肺胞がつぶれて急性肺炎の像を示していた。鳥インフルエンザ(H5N1)感染による所見に似ており、「ウイルスが肺胞に感染し急性肺炎を誘発する点」が、季節性と大きく異なる(田中教授)と指摘

している。

十一月に日本小児科学会が主催した新型インフルエンザの緊急フォーラムでは、田中教授グループの剖検例を参考に岡山県が事例紹介。呼吸器障害がみられた小児に、新生児の呼吸促進症候群で用いられるサーファクタント治療を行い、一命を取り留めたと報告した。田中教授は「インフルエンザ脳症に加え、呼吸器障害も念頭に診断が求められる」と、剖検結果からアドバイスする。国内で新型インフルエンザ死亡例(二十五日現在)は百七十九例。このうち日本病理学会が把握している剖検例は三例となっており、田中教授グループがまとめた論文

が、二十五日付の Japanese Journal of Infectious Diseases (JJID) 電子版に掲載された。

地主北大遺制研
准教授に助成

佐川がん
研究財団

佐川がん研究助成振興

コミュニケーション

来月20日

札幌医科大学と道医療大は、シンポジウム「医療コミュニケーション」の多様性を二月二十日午後一時から、中央区・札幌全日空ホテルで開く。

文部科学省十九年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム「双方向型医療コミュニケーション教育の展開」に基づき、両大学は医学生に対し多職種連携や患者教育のあり方を教育している。シンポジウムでは、医療コ